

コロナを吹っ飛ばせ! —クラブ活動の現場から—

クラブ紹介 硬式テニス部

新潟生命歯学部



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。硬式テニス部は男子9人、女子5人の計14人が在籍しています。昨年度は新型コロナウイルスの影響により、部

活動だけではなく合同合宿や大会などさまざまな行事が中止となってしまいました。普段は、夏の歯学体で一つでも良い成績が残せるように部員一丸となって練習に励んでいます。練習は学内コートで月・水・土の週に3回行っているほか、新潟市の大会への参加、いろいろな大学と練習試合を含めた交流などもしています。

硬式テニス部には、テニスを習っていた人から大学で初めてラケットを握った人まで、いろいろな先輩が在籍しています。もちろん、道具を持っていない人でも大歓迎です。また大学のコートは4面もあり、屋外の活動となります。従って、三密になりにくい状況でテニスができ、とても安心です。

生涯スポーツとも言われるテニスは、大学を卒業した後もずっと続けていけるスポーツです。新型コロナウイルスで不安や不満が溜まっていませんか？ ぜひこの機会にテニスを始めて、ボールと一緒にコロナに打ち勝ちましょう！ 皆様のご連絡、お待ちしております。



新潟生命歯学部3年
香村 知宏

生命歯学部



生命歯学部硬式テニス部は現在38人が在籍しており、火曜日と木曜日は小岩で、土曜日と日曜日は東小金井でトレーニングや基礎練習、ゲーム形式など日々上達を目指して活動しています。最近では全日本歯科学学生総合体育大会で女子優勝、男子5位、総合2位に入賞することができました。ほかにも5月に行われる新潟校との合同合宿などさまざまな楽しいイベントがあります。

硬式テニス部は明るく優しい先輩方が多く、部活動以外にも集まる機会があり、部員全体が仲が良いのが特徴の1つです。

現在は新型コロナウイルスの影響により部活動が行えない状況ですが、再開が可能になりましたら、多くのOB・OGの先生方に支えていただきながら部活に励んでいきます。

経験者、未経験者大歓迎ですので、新入生の入部を硬式テニス部一同楽しみにしています。



生命歯学部3年
久保田 哲廣

青 森県日本歯科大学校友会は昭和24年5月に新生校友会設立を要請され、第一回新生青森県日本歯科大学校友会を浅虫温泉で開催し、発足いたしました。その当時の会員数は37名で、交通機関の発達を考えれば会員同士が集まることは非常に大変だったと推察しております。現在は青森県校友会会員の総数は70名で、男性61名、女性9名の構成です。

本会活動について、毎年1月には新年会、6月には青森県校友会総会を開催しており、歯学会から講師をお招きして学術講演会を開催、また、校友会本部より役員の先生にご出席をいただき、最近の大学や校友会の事情などのご講話を頂戴しております。そして懇親会では遠方にお住いではなかなかお目にかかれない先生方との交流を深め、学生時代を互いに懐かしみ、更に最新の情報などを交換しつつ良い時間を過ごしております。

東北地区6県の校友会では、毎年秋に各県の持ち回りで校友会東北地区会員大会が開催されます。普段お会いできない先生方

との親交を深めることも楽しみのひとつです。

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらず、早や1年が過ぎ去ろうとしております。大学教職員の皆様、在学生の皆様も大変苦しい月日を過ごされていることとお察いたします。ワクチンの接種が3月ころより、ようやく始まるとのことです。時勢が快方へと向かい、在学生の皆様には学生同士が直接交流できるようになり、学問や研究、多くの体験を積み重ねることができ、心からの友をたくさん作ることができる生活を少しでも早くと祈っております。

日本は高齢化が進み超高齢社会になりましたが、我が校友会も御多分に漏れず高齢化が進んでまいりました。若い先生方が校友会へ入会されまして、そのお力を会で発揮していただきますように切にお願い申し上げます。現在青森県出身の在校生が8名程おられると聞いております。本会にご興味のおありの方や来青されました折には、ぜひご連絡くださいますようお願いいたします。

青森県校友会

会長 近藤 磨史 (65回)
近藤医院歯科 0175-64-2645

専務理事 玉山 元厚 (86回)
青葉歯科医院 017-782-1378



校友会・歯学会入会 オリエンテーション



新潟生命歯学部

日時：令和2年12月9日(水) 12:15～
場所：新潟生命歯学部講堂

令和2年12月9日(水)、新潟生命歯学部講堂において、6年生を対象に「校友会・歯学会入会オリエンテーション」が開催されました。74名の6年生が参加し、はじめに佐藤聡教務部長より、国家試験に向けての心構えと激励がありました。次いで将来の活躍のために校友会にぜひ入会して欲しいとの話があり、校友会および歯学会の概要が説明されると、6年生は熱心に聞き入っていました。最後に希望者には入会申込書に記入してもらい、入会オリエンテーションが終了しました。出席者全員が入会希望でした。

生命歯学部

生命歯学部は2月2日(火)に校友会・歯学会入会オリエンテーションを予定しておりましたが、緊急事態宣言中のため、対面による開催が叶わず、五十嵐学生部長よりリモートで開催いたしました。

学生短信

2020年は本来であれば、登院するはずだった前期がWeb授業になり、登院は後期に圧縮されて実施されるというイレギュラーな日程となりました。

前期はWeb授業を受講して授業ごとに提示された課題に取り組むという無機質な繰り返しに加え、外出を思うようにできず1日のほとんどを自宅で過ごすなければならなかったため、モチベーションを維持するの



新潟生命歯学部5年
田中 雄祐

当たり前と臨床実習のありがたさ

がとても難しい日々でした。そのため、家でできる運動を行ったり、外食に行けない分、普段よりも凝った料理を作るなどして生活にメリハリをつけつつ、気分転換をしていました。

新潟生命歯学部では諸先生方のご尽力により、後期から登院をすることができるようになりました。臨床の場で先生方からさまざまな知識や技能、考え方を学ばせていただけたのがとてもありがたく、臨床実習の意義を例年以上に実感できたと思います。

一方で、例年との違いに苦しめられる1

年でもありました。感染対策の強化、後期に登院が圧縮されたために生じる大幅な日程変更、いつ登院が停止になるかわからない不安など、挙げ始めれば際限がありません。

臨床実習は国家試験を突破する上でも、一人前の歯科医師になる上でも、大きな意味があるものだと思います。少しでも多くのことを学べるように、自分が医療に携わっているのだという自覚を持って、病院や私生活の中で感染対策を徹底していきたいと思っています。

『新十二歯考 十二支でめぐる歯の比較解剖学』

著者：田畑 純

出版社：医歯薬出版

出版年月：2020/6

請求記号：D.04/O 81

登録番号：100037577

動物の歯の特徴を、頭蓋骨や組織標本写真を用いて紹介する本書。歯科学、形態学、解剖学、発生学などの視点から、歯の構造の多様性や発生の仕組みがわかりやすく解説されています。干支に関わる12匹の動物を順に紹介しているので、身近に感じ手に取ってみたいくなる一冊です。

●図書館開館情報

開館情報はQRコードから閲覧ください。



『新型コロナ7つの謎』(BLUE BACKS B2156)

著者：宮坂 昌之

出版社：講談社

出版年：2020

請求記号：408-K-2156

登録番号：000139444

新型コロナについて免疫学の第一人者である著者が丁寧に解説した書籍です。山中伸弥教授も「新型コロナウイルスを正しく知ることが今最も重要なことで、最新の科学データを元に書かれた本書はその助けをしてくれるでしょう」と推薦しています。ブルーバックスらしくわかりやすいので「読むワクチン」としてぜひ読んでみてください。

●図書館開館情報

平日 9:00～17:00 土曜日 終日閉館

貸出・返却・閲覧のみの利用になり、学習は禁止です。

利用は在校生、大学院生、卒業生、職員までとなります。

診療室での物語

カルテ No.27

疾患との
静寂なる対話

新潟生命歯学部
病理学講座
東理 頼亮
(87回)

先日、2年に1度の歯科医師届出票の提出依頼があった。久々の記入に少々戸惑いながら、帰省が許されない今回のコロナ禍で得られた「貴重なひとりの時間」を使って、以前の自分を振り返ってみた。

歯科医師としての生活は1999年に始まった。学部から大学院、助手、講師と慣れ親しみ過ぎていた千代田区富士見町の生活から2008年に新潟歯学部(当時)のスタッフとなった。今では東京校に勤務していたことがまるでなかったかのように新潟の生活が長くなり、多くの親しみやすい先生方に刺激を受け、充実した毎日を過ごす反面、飯田橋で御指導いただいた先生方や数少ない友人達とは疎遠になってしまった。多忙を理由にこちらから連絡も挨

拶もせずに時が流れてしまっていたが、元気におられることを望む。

新潟到着の春の空模様は曇天だった。御挨拶代わりだったのだろうか、この地では珍しくもない霰の嵐だったことを思い出す。揺られるタクシーの中、降りそそぐ無数の乾いた音が奏でるドラムロールにいささか慄きながら、病院入口のロータリーに到着した記憶が甦った。

また、その年の冬の新潟市中央区は27年ぶりの大雪で、十二分に冬の神々に歓迎された。年甲斐もなく、「雪ですね!」と喜んでいたら、現在は引退されたベテランの臨床検査技師さんに「雪が原因で毎年亡くなっている人がいるんだから、雪見て笑っちゃダメ!」と怒られたことが懐かしい。とある冬の季節の記憶を辿ると、浜浦キャンパスの中原市五郎先生の御姿がわからなくなるほどの積雪量で、学生数人の力を借りて降雪が緩んだ放課後を見計らって救助活動に勤しんだこともあった(写真参照)。



雪の中の中原市五郎先生

東京校では大学院時代からマウスを用いての動物実験と学生教育が主体で、実験データ、とか識別指数、などという言葉が飛び交っていた。現在、自分の机上には1台の光学顕微鏡があり、各診療科から届けられる生検組織から作製されたガラス標本を保管する木製トレイ(マップ)の山に取り囲まれている。明らかに生活環境で激変したことは、業務の主軸が病理診断になったことである。上皮性異形成、扁平上皮癌、Warthin腫瘍、天疱瘡、エナメル上皮腫…既に歯科医師免許を取得し、地域医療に貢献なされている先生方はもちろん、病院の補綴学・保存学系統の医局や理工学や生化学等の基礎系講座に勤務なされている先生方にはとても懐かしい、いや、忌々しい響きの単語の数々ではなかろうか。

現在、正に勉学に励む3年生は言うまでもなく、今このコラムを読んでいる今後専門的に病理学を履修する1、2年生のあなたも、組織像とその特徴

(所見)の理解、記憶に悪戦苦闘することだろう(でも、きっと乗り越えられるから大丈夫)。

病理医は、診療室で医療行為を行う臨床の先生方とは異なり、患者さんに直接お会いする機会はほとんどない。だからといって患者さんの心情を考慮していない病理医はいない。臨床の先生方と同様に、患者さんの不安を一刻も早く払拭するために、ガラス標本を顕微鏡のステージにセットした瞬間から病理診断という、いわば疾患との深閑とした空間の中での対話が始まる。組織学で習得した正常な細胞や組織の形態からいかにかけ離れた状態(異型)となっているのか、細胞や組織の微細な変化を観察し、的確に診断名を決定することは、今後の治療計画を左右する重要な役割といえる。各分野の医師間の連携から生まれるチーム医療の重要性が求められている昨今、その一部を担い、病理診断に携わる我々も日々研鑽を積むことを止めない。

全国で活躍する160余名の口腔病理専門医のひとりとして、今後も迅速かつ正確な診断を心掛けていきたい。

